2004・No. 1 ■2004年1月15日発行 (通巻143)

神経科学ニュース

Neuroscience News・Japan Neuroscience Society

■ 〒113-0033 東京都文京区本郷2丁目37-6稲毛屋ビル504 TEL: 03-3813-0272 FAX: 03-3813-0272
日本神経科学学会

２００４年を迎えて

学会長　小幡邦彦

新年おめでとうございます。早いもので21世紀も4年目に入りました。皆様の研究がますます発展しますことを祈念し、本学会への積極的なご協力をお願いします。今期理事会の任期もあと1年となりました。ここで、現在取り組んでおりますことをご報告いたします。

本学会には毎年200-300名が入会され、退会者を差し引いてこの4年間で550名の増加があって、現在、会員総数は4221名です。神経科学分野では北米のSociety for Neuroscienceを除いては最大規模の研究者集団であり、これに見合った研究の推進が国内外の関係者、一般社会から期待されています。学会も会員の研究活動を側面からサポートしていく責務を負っています。

学会最大の事業は大会であり、研究発表と情報交換の場として会員に満足いただけるものでなければな

目　　次

2004年を迎えて ……1
第27回日本神経科学大会・第47回日本神経化学会大会合同大会
(Neuro2004)のご案内 ……2
2005年大会についてのお知らせ ……3
神経科学学会奨励賞の募集について ……3
Social Mixer for the Japanese Neuroscientistsに参加して ……5
北米神経科学学会に参加して ……7
第33回北米神経科学学会見聞記 ……8
2004年北米神経科学学会に参加して〈北米神経科学学会での発表を終えて〉……10
シンポジウム・研究会のお知らせ ……12
研究助成 ……17
公募 ……18
その他 ……20
編集後記 ……22

りません。近年、演題数、参加者の増加にともなって、自分の研究にとって有益な議論が行え、有意義であったとの参加者の声も多くなっています。一方、国際化が進むなかで、わが国の神経科学が孤立することは許されません。そのためには、招待講演者だけでなく、アジア諸国を中心に諸外国から積極的に一般参加していただいて、日本語を理解しない研究者でも大会の行事、発表、討論に十分加わることができるようにしたいと考えています。この方針のもとに昨年の名古屋大会では西野大会長のご協力で、発表の英語化をつよく打ち出しました。アジア諸国から演題を提出する若手研究者に対してTravel Awardの制度も始めました。IBROのアジアオセアニア地区理事会でも日本の大会が英語で行われていることが周知されれば、他国からの参加者が大幅に増えるだろうと話題になっています。この方針は今年の大阪大会でも引き継がれますので、ご理解ご協力をお願いします。

機関誌Neuroscience Research(NSR)は 津本編集主幹と編集委員会のご尽力で、毎号の掲載論文はバラエティーに富み、各論文の内容も急速に充実してきました。その効果がインパクトファクター上昇として現れる日も近いと思われます。それには会員の皆さんにどんどん投稿していただくことが必要です。本ニュース前号での宮川博士の寄稿にもありましたように、日ごろの情報交換が十分でない日本から外国の雑誌へ投稿した論文が不利な扱いを受けうることは現在でも否めないと思われます。もちろんそれを乗り越える努力も重要ですが、そのような心配もなく、自国から堂々と世界に発信していくことも望まれます。NSRはElsevier社のオーナーシップのもとに発行しており、来年で5年契約が終了します。契約を更新するにしても、時代の変化に対応し学会の要望が盛り込まれたものにするよう準備を始めています。Elsevierの購読料値上げに対抗して米国の大学図書館では購読中止の動きも出ていますが、そのような巨大出版社の戦略に巻き込まれるおそれとともに有利な点もあります。その一つとして同社の電子ジャーナルScience Directはほとんどの図書館に行き渡っていることから、それを通してNSRにアクセスされる件数は毎月9000件以上にのぼっています。

IT時代に入り、広報委員会電算化推進小委員会と大会担当者のご尽力で、Webサイトでの大会の参加登録と演題提出が確立されてきました。さらに学会からの各種通知・連絡を全会員に迅速にお伝えし、入会や所属先変更をWebサイト上でご自分で手続きしていただけるようには今年中にしたいと考えています。現在発行しているこのニュースや会員名簿の印刷体は電子版に代わっていく趨勢だと思いますし、会費納入もいつまでも郵便振込のお手数をおかけする時勢でもないと思います。これらについてもぜひご意見をお寄せ下さい。

動物実験反対運動は世界的に確実に拡大しています。そのなかで文部科学省のナショナルバイオリソース計画に実験用サルの繁殖供給体制が取り上げられたのは大きな前進です。しかしそのための親ザルを集めることにも反対の動きがあり、実現までにまだ努力を重ねることが必要です。これはサルやイヌ、ネコの問題に限られたことではないので、会員各位には動物実験については確固としたご意見を持っていただいて、社会、自治体に対応されるよう希望します。法律的対処が必要な場合も予想されますので、学会でもその準備を始めています。一般的問題、具体的問題についてご意見ご相談をお寄せ下さい。

では繰り返しになりますが、本年も会員の皆様の一層のご活躍を期待いたします。

第27回日本神経科学大会・第47回日本神経化学会大会合同大会(Neuro2004)のご案内

すでにご案内いたしました通り、第27回日本神経科学大会は、Neuro2004 として、第47回日本神経化学会大会との合同大会として開催いたします。Neuro2004 の概要が決まりつつありますので、以下の通り、前報以降決まりました分についてお知らせいたします。

1. プレナリーレクチャーは以下の3名の方にお願いする予定です(タイトルは現段階で仮題の先生もおられます)。
1) Mu-Ming Poo (UC Berkley)
"Spike timing dependent plasticity of neural circuits"
2) Michael M. Merzenich (UCSF)
"Brain plasticity contributing to developmental and adult disabilities, and to their effective therapeutic treatments"
3) Peter St. George Hyslop (Univ. Toronto)
"Molecular biology and genetics of Alzheimer disease"
2. その他に特別講演の演者として数名の方と現在交渉中です。
3. 一般演題は前報(神経科学ニュース2003 No.6)の通り、口演発表とポスター発表で、大会ＨＰ（インターネット）上での演題登録のみとなります(詳細はニュース 前号をご参照下さい)。演題登録開始は2004年3月1日、締め切りは4月20日を予定しておりますので、この期間での登録に向けてご準備お願いいたします。演題登録、英文抄録投稿は例年通り、UMIN サイトを利用して Web 上でおこないます。
4. 今回は大会の抄録はＣＤ－ＲＯＭのかたちでお配りすることになる予定です。Neuroscience Research サプリメントとしての英文抄録集はこれとは別に従来通り作成いたします。
5. 多数の皆様からシンポジウムへのご応募をいただき、有り難うございました。採否等については1月中旬頃にプログラム委員会で決定する予定です。
6. 1月中に大会のウェブサイトを立ち上げます。このサイトへは本学会のウェブサイトからリンクをはります。

■会期・会場・大会長
第27回日本神経科学大会・第47回日本神経化学会大会合同大会(Neuro2004)
会　　期：2004年9月21日(火)・22日(水)・23日(木)
会　　場：グランキューブ大阪(大阪国際会議場)
〒530-0005　大阪市北区中之島5丁目3番51号
TEL: 06-4803-5555　FAX: 06-4803-5620
大会長　村上富士夫(日本神経科学大会)
　　遠山　正彌(日本神経化学会大会)

■大会事務局：Neuro2004 大会事務局
〒541-0047　大阪市中央区淡路町3-6-13
(コングレビルディング　株式会社コングレ内)
e-mail: neuro2004@congre.co.jp
FAX: 06-6229-2556

2005年大会についてのお知らせ

2005年(平成17年)の大会は、7月26日(火)から28日(木)までの3日間、パシフィコ横浜にて開催予定です(大会長は、宮下保司・東京大学医学系研究科教授)。2004年大阪合同大会後の単独大会であることを考慮して、7月中の開催としました。パシフィコ横浜は、東京地区からのアクセスも更に便利になり(横浜から直通のみなとみらい線が2004年2月に開通予定)、シンポジウム会場、ポスター会場ともに十分な面積が確保できます。2003・2004年大会と同様に、口演、ポスターを併用する予定です。企画シンポジウムに対する提案を歓迎します。企画シンポジウム募集開始は、2004年9月を予定しています。また大会運営全般についての会員からの提案・意見を歓迎します。2004年2月には大会ホームページを設置しますので、そちらにご意見をお送り下さい(それ以前には、physiol@m.u-tokyo.ac.jp へお送り戴いても結構です)。

神経科学学会奨励賞の募集について

神経科学学会では、2003年の日本神経科学学会奨励賞の募集を開始しました。この奨励賞は、満37歳以下の若手研究者を対象としています。下記の要項をご参照の上、多数の方々がご応募くださることを期待しています。応募規定の詳細は、本号または学会ホームページを御覧下さい。

記

1. 趣旨

日本神経科学学会は、将来本学会で活躍することが期待される若手研究者を奨励することを目的として本奨励賞を設けました。本奨励賞は個々の論文を対象とするものではなく、申請者の研究実績、研究構想と発展性を評価して選考します。

2. 応募資格

3年以上の会員歴を有する満37歳以下(平成16年12月末日時点)の日本神経科学学会の会員を対象とします。受賞候補者は、原則として単名とします。

3. 表彰

日本神経科学大会において受賞者を表彰し、賞状及び副賞10万円を贈呈します。

4. 応募方法

応募者は次の(1)―(5)の書類を各10部ご用意いただき、神経科学学会奨励賞選考委員会宛て(〒113-0033　本郷四郵便局留め　日本神経科学学会　山根　慶子)にお送りください。

(1)申請書(所定の様式に従い、日本神経科学学会会員(正会員に限る)による推薦のあるもの、様式はホームページからダウンロードできます)、(2)履歴書(受賞歴を含む)、(3)主要業績リスト、(4)申請課題に関する800字以内の抄録、(5)申請課題に関連した論文(3編以内)の別刷(印刷中の論文については校正刷りの写し)。

5. 申込締切り

平成16年3月15日消印有効

以　上

日本神経科学学会奨励賞規定

1.(目的)

日本神経科学学会は、顕著な研究業績を有するとともに、将来日本神経科学学会で活躍することが期待される若手研究者を奨励することを目的として日本神経科学学会奨励賞(以下、奨励賞という)を設ける。奨励賞の英文表記は、Japan Neuroscience Society Young Investigator Awardとする。

2.(対象)

1) 3年以上の会員歴を有する満37歳以下の日本神経科学学会の会員を対象とする。

2) 受賞候補者は、原則として単名とする。

3.(選考)

1) 選考は公募による。

2) 応募者の中から毎年5名以下を選考する。

3) 奨励賞の選考は、奨励賞選考委員会が行う。選考委員会の構成は細則で定める。

4.(表彰)

日本神経科学学会大会において受賞者を表彰し、賞状及び副賞を贈呈する。

5.(受賞内容の発表)

受賞者は、受賞研究内容を「Neuroscience Research」誌に総説として発表する。

6.(改正)

本規定の改廃は日本神経科学学会理事会で行う。

本則は平成13年4月1日より施行するものとする。

日本神経科学学会奨励賞選考細則

1.(選考の対象)

奨励賞は個々の論文を対象とするものではない。申請者の研究実績、研究構想と発展性を評価して選考する。但し、対象となる研究の主たる部分が日本国内であることが望ましいが、外国で進められた研究であっても応募者の主導による場合は検討の対象とする。

2.(会員歴)

1) 学生会員であった期間は会員歴に含まれる。

2) 会費の納入が無かった期間は含まれない。

3.(選考委員会)

1) 選考委員会は8名(委員長を含む)で構成する。

2) 選考委員の任期は2年とする。

3) 一年ごとに半数の委員が交代するものとする。

4) 委員は、交代した年には、再任しないものとする。

5) 選考委員は指名委員会が指名し、理事会での承認を必要とする。

6) 選考委員会委員長は、各年度ごとに、委員の互選により選出する。委員長の重任はしないものとする。

7) 選考結果発表までは、選考委員の氏名は公表しな

い。
4.(選考)
1) 選考委員は、応募のあった候補者が直接の研究指導を受けているか、または研究指導にあたった期間から3年以上経過していない場合には、当該候補者に関する採点・評価には加わらないものとする。
2) 選考実施の細目は申請件数、内容などに応じて選考委員会で検討する。
5.(応募)
1)応募者は申請書(所定の様式に従い、日本神経科学学会会員(学生会員、賛助会員を除く)による推薦のあるもの)、履歴書、主要業績リスト、申請課題に関する800字以内の抄録、申請課題に関連した論文(3編以内)の別刷(印刷中の論文については校正刷りの写し)各10部を日本神経科学学会奨励賞選考委員会に提出する。
2)応募者の年齢は当該年の12月末日のものとする。
3)公募の締切りは毎年5月31日以前とし、神経科学学会研究奨励賞選考委員会で定めた日をその年の神経科学ニュースと学会ホ ームページに掲載する。
6.(副賞の金額)
当分の間1件10万円とするが、状況により理事会の承認を得て改訂することができる。
7.(附則)
本則を平成13年4月1日より施行するにあたり、委員の半数は任期1年、他は任期2年とする。この場合の各委員の任期については、指名委員会が定める。
8.(改訂)なお、本細則は平成15年12月15日に改訂された。

……

日本神経科学学会奨励賞申請書

平成　年　月　日

日本神経科学学会奨励賞
選考委員会委員長殿

申請者氏名:
生年月日:
日本神経科学学会会員番号およびパネル(○で囲む):
パネル1(分子・細胞神経科学)　パネル2(システム神経科学)　パネル3(臨床・病態神経科学)
申請課題:

日本神経科学学会奨励賞に応募いたしたく、履歴書、主要業績リスト、申請課題に関する抄録、申請課題に関連した論文の別刷を添えて申請いたします。

署名

下記の理由により、申請者　　を日本神経科学学会奨励賞受賞者としてふさわしいものと考え推薦します。

推薦理由:

推薦者:所属・職・氏名　　○印

……

Social Mixer for the Japanese Neuroscientists に参加して

理化学研究所　脳科学総合研究センター
臨界期機構研究グループ　俣賀　宣子

昨年11月の第33回北米神経科学会 (Society for Neuroscience, SFN) 大会において日本神経科学学会が後援する懇親会が開催された. はじめに今年で4回目を迎えたこのSocial Mixerが盛況に終わったことをここにご一報さしあげるとともに、世話人をして下さった林康紀先生、サポートして頂いた企業の方々に参加者を代表してお礼申し上げます.

この会が初めて企画された1998年の時点でSFN会員数は、アメリカ、カナダに続き確か日本は3位だった. そこで、「もっと積極的に学会に関わりた

い！」ということになり、「国内外で活躍する日本人あるいは日本の研究や技術に興味をもつ方々にくつろいだ雰囲気の中で深く議論して頂く場を提供する」という名目でこの懇親会を始めることになったと聞いている．今回の開催地ニューオリンズには2万8千人以上もの研究者が集まった．その中に日本人が何名いたかは定かではないが、年々会場で見かける日本人の数が増えているのは間違いない．学会の会場で知り合いに会うと挨拶だけでなく立ち止まってちょっと近況を聞いてみたい事が多い．なかなか会うチャンスがない相手だと積もる話もある．しかし、この学会では、綿密なスケジュールをたて、遙か遠い目的会場まで時間通りにさっさと歩かないと見たいもの聞きたいものすべてを消化することができない．結局「会場でお見かけしましたが、お話しする時間の余裕がなかったので」と帰国後e-mailを送ることも少なくない．そこで、この懇親会の存在がとてもありがたい．また、かつてポスター会場にてアメリカ人から共同研究を申し込まれたが果たして受けるべきかどうか悩んだことがあった．この時も懇親会を利用させて頂いた．

さて、今年の懇親会の様子を少し披露したいと思う．とは言っても、実は私自身はかなりの遅刻をした．なぜなら、私が参加したセッションが終了し、懇親会会場となったシェラトンホテルにたどり着いた頃には会場はすでに満席であり、食事もほぼ終わっていた(開始時刻が少々早めであったことと、学会開催4日目にして脚力に自信がでてきた私は会場まで歩いたこととが敗因である)．そこで、他力本願、理研内で懇親会に参加した方々に始まりの様子や感想を聞いて回ることにした．その結果をまとめると、食事はバイキング形式で、地元のお料理とローストビーフがメインだった事、なかなか豪華でおいしかった事、食事が一段落した頃からなんとなくポスターに人が集まりだし、時間に余裕をもって議論できた事などがわかった．昨年までは話題提供として2～3名がスピーチして下さったが、今年は初めてポスターを披露するという形式だった．学会会場では人気のあるポスターだと質疑するのも至難の業だったり、同じキーワードのものは自分自身の発表と時間が重なっていたりする．また、日本人同志英語で説明しあうのが気恥ずかしい人も多いだろう．そこで、このポスターによる話題提供は好評であった．そういえば、昨年まではUSが入っていた懇親会名が今年はfor Japanese Neuroscientistsに変わっていた．その為か今年の参加者の殆どは日本人であった．そこで、会の名前を統一して頂いた方がこのイベントの宣伝効果は高いのではと思った．さて、話を戻し、私はというと学会会場で立ち話できなかったこの懇親会常連の先生方とScience Ethicsに関するお話しすることができたし、かつてお世話になった先生とお目にかかることもできた．「ニューオリンズに留学中でとにかく日本人と話したい」という人見知りをしない青年にも会い、楽しい時間を過ごさせて頂いた．私だけでなく、他にも「前々から気になっていた方と知り合いになれ有意義な会だった」と話してくれた方もいる．手前味噌ではあるが、この懇親会の前夜、今回初めてRIKEN BSIでもSocialを開催した．こちらも理研関係者のみならず、日本にて研究をしていたことがあるとの外国人を交え賑わった．これで、日本が主催するSocialが2つになったわけである．さらに本大会においては、我がグループディレクターTakao Henschがシンポジウム Sleep and Plasticityを主催し、光栄なことに多くの方々に集まって頂くことができた．SFNは「北米学会」であるが、実質的には最も大きな「国際神経科学学会」である．そこで、今後もSocial Mixerが続き、単なる井戸端会議場ではなく老若男女に主旨通りに有効利用されること、そして、来年San Diegoにおいて開催される年大会においても日本主催のシンポジウムが採択されることを期待したい．

北米神経科学学会に参加して

大阪大学大学院基礎工学研究科生物工学分野
西本伸志

2003年11月、北米ニューオーリンズで開催された第33回北米神経科学学会に参加した。渡米も初めてであれば同学会に行くのも初めての身として、準備の段階からまず驚いたのがやはりその演題数の多さである。演題を検索・選択して予定を作ることが出来るItinerary Plannerというソフトが公開されていたので、興味のある演題を何気なく選んでいったら毎日平均140件もの演題を見るという予定表が出来てしまった。ありえない数である。筆者の関係する視覚系の発表に絞ってなんとか一日数10件に落ち着かせる。この時点でまず油断してはいられない場所に行くのだと感じる。しかし、この予定表のなんと豪華なことだろう。論文で名前を見るのみだった著名な科学者達が軒並み名を連ねている。ミーハーに騒ぐ心と初の英語スライド発表に対する不安を抱え、一人日本を後にする・・・

北米神経科学学会(Society for Neuroscience annual meeting)は“世界有数”との修飾が冠せられる巨大学会である。複数のシンポジウムと特別講義、10を超えるスライドセッション、そして1000を超えるポスター発表が同時平行して行われ、それらがすべて午前と午後に分かれていて1日に2セット用意されている。今回の場合、参加者は28,800人を超え、デトロイト(アメリカ北端)の入国審査官すらニューオーリンズ(アメリカ南端)で開かれる同学会を知っていて(入国審査の際、なかばあきれ顔で「よほどでかい集まりがあるんだろうね」と言われた)、会期の初日と最終日にはニューオーリンズ空港はほとんど麻痺状態だったという。ここではそんな巨大学会にもまれた、約28,800分の1の参加者として感じたことを書いていきたい。

筆者が現在行っている大脳皮質初期視覚野における情報処理機構に関する研究は、日本国内においてはどちらかというとマイナーな分野であり、研究の主流は米国内の研究室が担っている。今回の学会参加を通じてこのことを肌で感じさせたのは、ポスター会場を歩いていて感じる(日本の学会では残念ながらあまり感じたことのない)“居心地の良さ”であった。つまり、発表者の気持ちがわかるのである。ある研究の面白さを理解するためには「あなたは、なぜ、今、それをやっているの？」という動機・背景の部分を知ることが重要なことだと思うが、その部分を共通して持っている人達が目の前にいる。ポスターの前に立つとたいてい「一通り説明(run through)する必要があるか？」と聞かれるけれど、そんなまどろっこしいことはいいから早くこのプロットの解釈を教えてほしい、そして僕の解釈を言わせて！と言いたくなることが多々あった。これは楽しい。ある意味で今回はじめて学会に参加する醍醐味を味わったという気がする。また、この分野の発表に関して全体的に感じたことは、解析手法そのものを新たに考案し、その結果を元に新たな現象を見いだそうとする傾向が強いということであった。新しい動きとしては、80年代に考案され90年代に一定の――控えめに言っても――成功を収めた逆相関法を応用し、非線形性あるいは高次領野からのフィードバックを含めた応答特性を直接観察しようとする研究が多く見られた。どれもまだ新たな現象を発見した(あるいは発見しよう)という段階に留まっており、その仕組みを解明するというところまでは議論が至っていなかったように見えたが、論文としてまとまる前のいわば原石の状態をかいま見ることが出来たという意味で、またもちろん視覚系の研究に新たな切り口を提供する可能性のある研究という意味で大変興味深かった。また、中には現在筆者の研究室で行っているプロジェクトと切迫していて、発表を聞きながら冷や汗をかいてしまうような研究がいくつかあった。研究が重複してしまう可能性を下げるためにも、来年からはたとえ参加はしないまでも抄録集のチェックぐらいはしておいた方がいいと感じた。

今回著者はスライド発表という国際学会初参加にしては少々(？)身に余る機会を頂いた。大会3日目の朝8時ちょうどからという時間にもかかわらず、

セッション自体の人気からか多くの方に発表を聞いていただくことが出来た。とくに質疑応答では今回の研究発表の大元となるメソッドを開発したD. L. Ringach博士(UCLA)ご自身から質問を受けることが出来、また発表後にもコメントを頂くことが出来たことが望外の収穫であった。今回、自身の発表、また他の方々の発表を通じて感じたことは、発音が悪いとかイントネーションが英語っぽくないという不利はあるとしても、構成が上手く出来ていれば発表の内容を伝えることは難しくないということである。Native speaker、とくにアメリカ人の発表に判りやすいものが多いのは、英語の出来もさることながらやはりその構成の妙が効いているのだと思う。良いところは参考にしていきたい。一方で、質疑応答に関しては満足のいくやりとりを行うためにはさらに英語力を上げる必要があると感じた。英語と一口に言っても実際の発話にはかなりのバラエティがあり、個人的にはとくにイギリス人とドイツ人の英語が聞き取りづらかった。CNNやVOAだけでなくBBCも聞かなくては・・・(ドイツ人の英語に慣れるためには何をすればいいのだろう？　英語といえば今回の渡米で最も困ったのは、ニューオーリンズの街の人、ホテルの従業員やコンビニの店員さんの黒人英語が満足に聞き取れないことだった。渡米初日にホテルの部屋のインターネットサービスが使えずエンジニアを呼んだときには、完全に英語がしゃべれない人という扱いを受け、あれ僕って確か明後日には学会で発表するんだよな？としばし不安に陥った。不安は学会会場で話すことである程度解消した。科学者という人種は職業柄下手な英語に寛容な面があるのだろう)

昼間に行われる白熱した議論のあとには、Socialというちょっとお酒でも飲みながら気楽に話しましょうという趣旨の会合が用意されていた。そのテーマも「Synapses Social」「Turkish Neuroscience Social」のような特定の興味・集団に基づくものから「Lesbian Bisexual Gay Transgendered Neuroscientist Social」のようなさすがアメリカ、というものまで多岐にわたる。筆者の参加した「Vision Social: Battle of the Methods」という会合は、その名の示すとおり視覚系の研究に関連深い4つのメソッド(心理学、コンピューティング、イメージング(fMRI)、電気生理学)について、各メソッドを代表する4人のパネラーがいて、それぞれのメソッドがいかに視覚系の理解に貢献しているかということを題材に互いを罵倒、もとい議論をし、会場からの投票により勝者を決めるというものであった。このような企画自体が冗談そのものという集まりが公式のイベントとして用意されていて、そこに多数の人が集まると言うところに巨大学会の層の厚さを感じた。ちなみに戦いの結果はというと、この種の話の常として最も口が悪く最もよく喋る人が優位なのである。今回最もよく喋るのは我らがJ. A. Movshon博士(New York Univ.)であった。話の内容は恐ろしくてとてもここには書けない・・・各メソッドがそれぞれに補完しあい、仲良く研究をして行けることを願いたい。

一般に、大きな学会に参加することは普段自分が接することのない周辺(あるいは全く別の)分野における研究に接する良い機会であるとされる。しかし今回の学会参加を通じて感じたことはむしろその逆であった。つまり、自分の分野に直接関係する研究が目白押しで、他の分野の話を聞きに行く余裕がほとんどなかった。これはどちらかというと嬉しい誤算とでも言うべきものだろうが、一方でちょっともったいない、という気もする。初めての北米神経科学会は、準備の時点から最後まで圧倒されたまま過ぎていった。次に参加する機会があるのなら、もう少し余裕を持って臨めたらと思う。

第33回北米神経科学学会見聞記

北海道大学大学院医学研究科解剖発生学分野
深谷昌弘

平成15年11月8日～12日にニューオリンズで開催された第33回北米神経科学学会(Society for Neuroscience 33rd Annual Meeting)に参加したの

で神経科学ニュースの書面をお借りして見聞録を書かせていただきます。北米神経科学学会に参加するのはこれで2回目となり、修士課程1年で参加した前回は、只々学会の規模の大きさに圧倒されていたように思います。今回は自分なりに幾つかの目的を持って参加したわけですが、達成できないことも多々ありました。もちろん規模が大きすぎてすべての発表を見て回ることはできず、すべてのトピックを紹介することはできませんので、本稿では筆者がこの学会に参加した意義や学会の雰囲気だけでも伝えることができればと思います。

ニューオリンズに到着した日は札幌で初雪が観測された日で、コートを手放せない気候から急に半袖でも過ごせるアメリカ南部の温暖な気候の変化には嬉しくなってしまいました。学会会場となるMorial Convention Center のすぐ南には世界第3位の長さを誇る大河ミシシッピが流れており、昼夜を問わず大型貨物船が汽笛を鳴らしながら行き交っていました。さすがアメリカ第2位の貿易港です。また、ニューオリンズにはかつての領主国であるフランスやスペインの名残が多く、フランス語の地名やスペイン風の家屋が目に付きました。そのおかげなのかクレオール風やケイジャン風といった独特のニューオリンズ料理があり、歴史を感じながら食事を楽しむことができました。ニューオリンズの見聞はこれくらいにして、肝心の学会の見聞に移りましょう。

今回の学会も例年と同じだと思いますが、一般演題の大部分はポスター発表で、午前と午後のセッションに分かれて行われ、その他にスライドセッション、シンポジウム、特別講演などが広い会場のいたるところで進行していました。一度に1,000を越えるポスターが張り出され、学会期間中に1万数千もの演題が発表される中から自分の見たいもしくは聞きたい演題を事前にピックアップしておいても、たどり着くだけでくたびれてしまいました。しかし、疲れていても興味深い研究を行っている研究者との議論は有意義なものでした。学会の参加者数も多く、今回の参加登録者数は約22,800人だったと記憶しています。また、ニューロサイエンスと言っても100以上のサブテーマに分けられており、それぞれの分野に多くの研究者がいることを改めて実感させられました。筆者は、あらかじめ自分の興味ある発表をチェックした後、宝探し的な気分で普段論文を読まないような分野の発表を見て回り、何か自分のヒントになる物はないかと徘徊していました。それができるのがこの大きな学会の利点の一つかもしれません。逆に、自分がポスター発表するときには、同じ分野の人が来ることはもちろんですが、異分野の人に如何にうまく説明できるかが鍵になると思いました。学会での筆者の発表は、「NMDA受容体のヘテロメリックな特性として必須サブユニットであるNR1が欠損すると調節サブユニットであるNR2はER retentionを引き起こしてしまうことを生体内の系で証明した」という内容だったのですが、質問に対して的はずれな返答をしていたり、うまく説明できない点があることを思い知らされ、自分の英会話能力の低さに反省する毎日でした。

筆者の本学会での目的の一つに海外の共同研究者と会うことが入っていました。これまで一度も会ったことも話したこともなく、電子メールのやりとりで共同研究を行ってきた研究者と直に会って話ができたというのは有意義でした。さらに、こんな人に自分が作製した抗体を供与していたのかと落胆する場面もあり、いくら電子メールが発達しても会うことで実際の人を知ることの重要性を実感した学会でもありました。また、知り合いの先生の誘いでアメリカ在住の日本人研究者に会う機会にも恵まれ、アメリカの大学院生と共に宴を楽しむこともできました。さらに、11日の夜に開催されたRIKEN-MITの林康紀先生が主催する日本人研究者のサテライト集会へのお誘いを受け、多くの日本人研究者との交流で様々なことを学ぶことができました。大変な準備をされていた林先生にはこの場を借りてお礼申し上げます。

最後に、この学会は巨大になりすぎたということで敬遠され、批判的な意見を聞くことがありますが、筆者のような若輩研究者にとっては、目的を持って参加すれば得る物が多い学会であることは間違いありません。毎年参加すべきかどうかは疑問で

すが、数年に一度はあの活気あふれる刺激的な会場に身を投じてみるのも良いのではないでしょうか。

2003年北米神経科学学会に参加して
北米神経科学学会での発表を終えて

新潟大学脳研究所細胞神経生物学分野
阿部学

11月8～12日、ニューオーリンズで行われた北米神経科学学会へ参加し、ポスター発表を行ってきた。海外で開催される学会への参加、発表自体が初めてのことであったため、後悔や反省点も多いが非常に貴重な経験となった。以下に体験に感想を交えて記す。この文章を読む、以前の私と同様の、学会参加未経験者の方には今後の参考として頂けると幸いである。経験豊富な方には、是非、読み飛ばして頂くことをお勧めする。

・出発まで

特に自発的に参加しようとしたわけではない。ボスから一言「北米神経科学学会に発表しに行かないか？」と提案(事実上は命令)されたことが本当の理由だ。あらかじめ断っておくが、私は英語が大の苦手である。しかし今更この歳で、そのような理由で辞退できるわけもない。3秒間、思考が停止した後、「ええ、そろそろこの研究に関してはポスター発表しておくのも良いですね」と表面上は快諾した。内心では頭を抱えているが、必ずや良い経験となるであろうと、無理に自分を納得させたものだ。

5月中旬に発表申し込み、9月末に学会参加登録を行った。当然オンラインでできるし、ホームページには各登録のdeadlineが明記されているので、安心してギリギリまで登録作業をしなかった。週に1回位はまだ期限が過ぎていないことを確認していたが、そんなことをしているくらいならば、さっさと登録を終えてしまえば良いというのが正しい意見なのだろう。

参加登録を終えた頃から、ことあるごとに「発表用のポスターってどうなってるんだっけ？」とボスに問われる。この質問に込められた、準備を始めるのが遅いことに対する苛立ちには気付かないよう装いつつ、ボチボチとポスターを作りはじめる。学会が推奨するポスターのスタイルというのが有ることを知らず、土壇場で作り直すよう指示され、結局ポスターが完成したのは出発前日であった。万事において、ゆとりを持って行動したほうが良いとの教訓は、小学生時代、半分以上残った夏休みの宿題を休み最後の日に泣きながら完成させたときに得たもののはずだったが、それが20年近く経た今も全く身についていない。

・会場にて

会場に到着し、まずはその広さに驚かされる。参加者は2万人を超えるというだけあって、会場内の騒々しさも大変なものだ。時折、子供が走り回っているのも目に付く。家族全員が会場内にいられるシステムが整っているようで、とても和やかな雰囲気で良いものだ。不満だったのは、どの部屋の冷房も効き過ぎだと感じたことくらいである。

出発前日まで慌しかったため、発表演題のチェックが疎かになってしまったのは最大の失敗であった。Itinerary Plannerをダウンロードしたのである程度抄録の検索はできたが、パソコンの性能のせいか、どうもサクサクと検索できなかった。現地で何とかしようと思い、会場内にて配布された一日ごとのタイトル集で、空き時間やホテルで眠れないときに興味深い演題を探していく。だが、さすがにタイトルだけだと、想像していた内容と違っているケースが多く、広大な会場内を無駄に歩き回る羽目になってしまった。会場内にも検索用のパソコンが数十台開放されていたが、混んでいることが多い。やはり、演題のチェックは出発前に終わらせておく作業の一つであろう。

大規模な学会の醍醐味はポスターセッションにあると考え、シンポジウムやスライドセッションなどは、自分の興味の対象となるもの程度に絞って聞くことにして、できる限りポスター会場内を探索してまわった。

多くのポスターに、発表者の求職広告？らしき文が記してあるのが見かけられる。知人が「ポスター会場は実は就職活動の場でもあるんだ」と言っていたのが、あながちウソじゃなかったことに驚いた。色々と考えてみると、確かに合理的なシステムだと感心する。

ときおり有名な神経科学者がポスター発表している。記念に写真を撮ろうかとも考えたが、そんなことをしている人もいないので止めておいた。黒山だかりで近付けなかったが、参加者の誰もが世界的に著名な研究者と直接討論できる機会を持てるのは、やはりこの学会の規模のなせる秀逸な点なのであろう。

余りの規模の大きさのため、学会全体に対するコメントなどはできるはずも無い。私の専門はノックアウトマウス作製とシナプス可塑性や記憶、学習に関する研究であるので、そのような視点から感想を一つだけ述べさせて頂く。まず、単純なノックアウトマウスの解析報告といった発表の比率が極端に低く感じられた。それ自体はいわば当然の流れであり、それに代わって分子内の部分的欠損や点変異型分子の発現による、より詳細な解析を狙った研究が増えてきているようであった。この解析手法はアイディア次第で非常に有効となり得るが、やはり従来と同様の遺伝子改変マウス作製の労力を要求されるという弱点もあり、汎用性にやや乏しいと私は考えている。その一方で、論文等で目にする以上にRNAiが広く適用され、成功例も増え始めてきているという感があった。それに同調して、ウイルスベクター等を含め、生体内への遺伝子導入法もより洗練されてきているようで、今後はこれらの手法を組み合わせた、多くの論文が発表されてくるという予感がする。ノックアウトマウスの論文でよく見かける名前もそれらの発表者の中に含まれていたりするので、やはり実験手法の革新のため、各分野の研究者による並々ならぬ努力が注がれているのであろう。周知の通り、遺伝子改変マウスの樹立には多大な労力、時間が費やされるため、代替となる有効な新手法が確立した場合、あっという間に時代遅れの技術になるのではないかという、漠然とした危機感を私は常に抱いていた。しかし、この学会に参加し最新の情報に触れることで、自分の置かれている現状と、良い意味で警戒すべき分野、技術との連関を再認識することができたと思う。それまでの漠然とした危機感を、今後の研究の眼目をはっきりさせ、実験を推進してゆくための原動力となる危機感へと転換させられたことが、この学会での最大の収穫であったと思っている。

肝心のポスター発表は恙無く終わった。当日は極度の緊張で腹のなかに酸性の液が溜っているような気分になり、終了時間が来ることだけを望みながらプレゼンテーションしていたように思う。せっかくのポスター発表であったが、自分の英語力の問題もあり、討論というよりは一方的に質問されて、それに答えるのが限界だった。受けた質問や指摘は妥当なものであり、自分のデータを前にして多くの専門家と意見を交換することの重要性を、改めて感じた。最後に話をした若いアメリカ人に「来年サンディエゴでまた会おう。しっかり英語を勉強して来いよ！」と明るい笑顔で言われた。望むところだ。

INFORMATION

シンポジウム・研究会

トランスレーショナルリサーチ(TR)と先端医療コース

神奈川科学技術アカデミー教育講座
平成15年度第IV期　受講生募集

～21世紀の生命工学と生命倫理～

■カリキュラム編成者　東京大学医科学研究所附属病院　名誉院長　医学博士　浅野茂隆
東京大学医科学研究所　教授　医学博士　新井賢一

■コースの特色・ねらい

基礎研究から臨床応用への橋渡しを行うトランスレーショナルリサーチ(探索的臨床研究)の充実が急務であるが、最新の先端医療を実際の医療現場に適用する場合でも、これまでの大学医学部及びその附属病院を主体とした実用化では、その対応は限界を迎えつつあります。また、この探索的臨床研究には、医学はもちろんのこと理工系分野全般にわたる広い知識が必要とされ、人に適応されるという領域であるがゆえに生命倫理や法規制といった様々な問題もあります。このコースでは、先端医学の現状を把握し、その臨床応用へ、さらには産業へと発展させるテーマについて学びます。また、決して避けてはならない生命倫理の問題についても参加者とともに考えてみたいと思います。

■講義日　H16、2/16　2/17　2/26　3/1　計4日

■主なカリキュラム内容

【先端生命科学技術応用：現状と展望】(総論: ＩＴ、ＢＴ、ＮＴの融合に関して / 畜産分野での応用 / 農作物での応用 / 医療分野での応用(1)幹細胞利用技術の展望と問題 / 医療分野での応用(2)脳高次機能解析への展望)
【ＴＲの位置付けとその推進のあり方】(ＴＲに先行する動物実験のあり方 / 企業家の立場から)
【ＴＲプロジェクト推進の実際】(ウイルス療法 / 遺伝子治療 (1)(2)/ 再生医療 / ＲＮＡｉ療法)
【先端医療研究倫理と社会的合意】(問題提起と提案 / 生命倫理上の問題意識)

■開催場所 東京大学医科学研究所(東京都港区白金台)

■受講料

区　分	一　般	KAST法人賛助会員／神奈川県内中小企業
全日程	50,000円	40,000円
1日単位受講	15,000円／日	

■申込締切日　平成16年2月2日(月)

■募集人員　25名＊1日単位の受講は応募者数が定員を超えた場合、全コース受講される方を優先し選考します。

＊やむを得ない事情により、日程・内容等の変更をする場合があります。

＊受講料の中には消費税が含まれています。

＊施設見学については、各企業・研究機関のご厚意・ご協力により実施しております。また、企業の施設については，同業者の方の見学が制限される場合がありますので、ご了承ください。

＊KAST法人賛助会員は、登録されている事業所単位です。

＊神奈川県内中小企業とは、本社または事業所が神奈川県内にあり、資本金が3億円以下または企業全体の従業員が300人以下である企業をさします。

問い合わせ先：
財団法人 神奈川科学技術アカデミー　教育交流部 教育研修課
〒213-0012　神奈川県川崎市高津区坂戸3-2-1 KSP西棟6階

Tel 044(819)2033　Fax 044(819)2097　E-mail: ed@kast.or.jp　http://home.ksp.or.jp/kast/

国際シンポジウム「Molecular Clock 2004 Tokyo」のお知らせ。

新春早々に(2004年2月26日ー28日)に開催される 国際シンポジウム Molecular Clock 2004 Tokyo の御案内をいたします。

時計遺伝子関連の研究は、近年急速に進展し、多くの体内の現象が、リズムと関連付けられて述べられるようになりました。今回の国際シンポジウム「Molecular Clock 2004 Tokyo」では、最近の時計遺伝子研究の進展の紹介はもとより、睡眠、がん治療、血圧調節など、より臨床的になじみの深い話題を重点的に取り上げます。時計遺伝子発見後のリズム研究は、ゲノム、ポストゲノムのメカニズムが次々に明らかになり、ライフサイエンスの研究の最前線に立っており、ヒトの疾病の治療にもこれらの知見を基にした新しい展開がなされようとしています。

今回のシンポジウムで、遺伝子研究から時間医学への変貌の実態を理解していただけたら幸いです。ポスター会場も少々ですが設けますので希望される方はWeb siteをご覧ください。

URL: http://www.pac.ne.jp/ismc2004/

主な Speakers
O Hayaishi (Osaka Bioscience Institute), Y Sakaki (University of Tokyo), J Dunlap (Dartmouth Medical School), T Kondo (Nagoya University), P Sassone-Corsi (IGBMC Strasbourg), Y Fukada (Tokyo University),J Loros (Dartmouth Medical School), W J Schwartz (University of Massachusetts), F Levi (Hopital Paul Brousse), G A Bjarnason(Toronto-Sunnybrook Regional Cancer Centre), J Blau (University of NewYork) .H-W Korf (Goethe-University Frankfurt), K Kim (Seoul University), G van der Horst (Erasmus University Rotterdam), S Shibata (Waseda Univeristy),

参加するには登録が必要で、先着300名様をWeb Siteで受け付けておりますのでご覧ください。

本シンポジウムはこの分野の研究者だけでなく、ライフサイエンス関連の研究者の方も歓迎いたします。文部科学省の科学技術振興調整費によって開催され、入場は無料です。皆様のご参加をお待ちしております。

大会会長：
神戸大学大学院医学系研究科分子脳科学分野
岡村　均
TEL 078 382 5340　FAX 078 382 5341

第31回生理研COE国際シンポジウム

感覚運動機能研究への多様なアプローチ -- 新しい研究パラダイムによる最新の展開
Multidisciplinary Approaches to Sensorimotor Integration
--- Old Questions Meet New Concepts--
2003年3月16-18日(岡崎コンファレンスセンター)

何故私達の手はなめらかに動くのか、眼は瞬時に正確に標的をとらえられるのか、という問題は古くから脳科学の中心的課題でした。しかし人間の動きを完全に再現できるロボットがまだ作られていないように多くの未解決の問題が残されています。そして、近年運動制御を考える脳科学は、これまでに蓄積された膨大な知見を基礎とし、さらに分子生物学やコンピューター科学、ロボット工学などとの融合を経て実に多様な変貌を遂げつつあります。かたや運動制御に関わる神経回路の設計図を分子レベルから精緻に描き出そうとする研究、脳や脊髄の損傷からの機能回復を促すリハビリテーション科学の発展を目指す研究、運動機能の発達・学習のメカニズムを解き明かす研究、動物にならって滑らか

な動きをするロボットを開発するための研究、脳の信号を使って義手を制御することを目指す研究、注意やモチベーションなど「こころ」の中身がどうして運動に反映されるのかを解き明かす研究、さらにはパーキンソン氏病などの病態の解明と治療を目指す研究など、様々なレベルで運動制御に関わる脳科学の世界の最先端を行く国際的な研究者が一同に集って最新の研究成果を発表し、さらにそれぞれの守備範囲を超えて将来の研究の発展を見据えた議論を展開します。

From abroad;
Eberhard E. Fetz (Seattle, USA), Roger N. Lemon (London, UK), Bror Alstermark (Ume Sweden) Lars-Gunnar Pettersson (Goeborg, Sweden), Andrew Schwartz (Pittsburgh, USA), Stephen H. Scott (Kingston, Canada), Randy Flanagan (Kingston, Canada), Daniel Wolpert (London, UK), Ole Kiehn (Stockholm, Sweden), Sten Grillner (Stockholm, Sweden), Joseph Fetcho (Stony Brook, USA), Hans Hultborn (Copenhagen, USA), Peter L. Strick (Pittsburgh, USA), Reza Shadmehr (Baltimore, USA), Okihide Hikosaka (Bethesda, USA), Hagai Bergman (Jerusalem, Israel), Hitoshi Kita (Memphis, USA), Adonis Moschovakis (Crete Greece), William C. Hall (Durham, USA), Martin Par　(Kingston, Canada)

From Japan
小田洋一 (大阪大学大学院生命機能研究科),　丹治順(東北大学大学院医学系研究科),　入来篤(東京医科歯科大学医歯学総合研究科)　平野丈夫(京都大学大学院理学系研究科)　川人光男(ATR脳情報研究所)　高田昌彦(東京都医学研究機構神経科学総合研究所)　青崎敏彦(東京都老人総合研究所)　銅谷賢治(ATR脳情報研究所)　篠田義一(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科)　福島菊郎(北海道大学大学院医学研究科)　木村實(京都府立医科大学)　佐々木成人(東京都医学研究機構神経科学総合研究所)　河野憲ニ(京都大学大学医学系研究科)　永雄総一(自治医科大学)　蔵田潔(弘前大学医学部)　北澤茂(順天堂大学医学部)　南部篤(生理学研究所)　伊佐正(生理学研究所)

日時:2003 年 3 月 16 日　9:00 - 3 月 18 日 18:00
場所: 岡崎コンファレンスセンター大会議室
(http://www.occ.orion.ac.jp/index.html/)
問い合わせ:生理学研究所　遠藤利朗
TEL: 0564-55-7857 FAX: 0564-55-7790
E-mail: tendo@nips.ac.jp
URL: http://www.nips.ac.jp/hbfp/

理研 BSI サマープログラム 2004 のお知らせ

理化学研究所脳科学総合研究センター(BSI)では、2004 年度も引き続き脳科学に関心をもった国内外の若手研究者を対象としたサマープログラムを開催いたします。詳細をホームページに掲載しておりますので、関心のある方はぜひご覧ください。応募をお待ちしております。

サマープログラムには、約 2ヶ月間 BSI のひとつの研究室に滞在し研究を実体験するインターンシップコースと12日間のレクチャーコースの 2 つのコースがあります。

今年のレクチャーコースは、Learning and Memory: Systems, Theories and Molecules というテーマで開催されます。

開催期日：
< インターンシップコース > 2004年6月28日～8月27日
< レクチャーコース >2004 年 7 月 6 日～7 月 16 日

講師：
Ralph Adolphs (University of Iowa)
Shun-ichi Amari (RIKEN BSI)
Thomas J. Carew (UC Irvine)
Peter Dayan (University College London)
Masao Ito (RIKEN BSI)
Michael D. Mauk (University of Texas)
Randolf Menzel (Free University Berlin)
Yasushi Miyashita (University of Tokyo)
P. Read Montague (Baylor College of Medicine)
Wolfram Schultz (University of Cambridge)
Larry R. Squire (UC San Diego)
Alex M. Thomson (University College London)
Susumu Tonegawa (RIKEN-MIT)
David S. Touretzky (Carnegie Mellon University)
Tim Tully (Cold Spring Harbor)
Anthony D. Wagner (Stanford University)

場所:理化学研究所　脳科学総合研究センター
(埼玉県和光市)
申込締切：2004 年 2 月 29 日(必着)
参加申し込み・問い合わせ先：
〒 351-0198
埼玉県和光市広沢 2 － 1
理化学研究所 脳科学総合研究センター
サマープログラム実行委員会
http://www.brain.riken.jp/summer.html
FAX 048 (462) 4914
E-mail: info@brain.riken.go.jp

第 8 回国際誘発電位シンポジウム

謹啓　時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さてこのたび私どもは、第8回国際誘発電位シンポジウム(8th International Evoked Potentials Symposium)を 2004 年(平成 16)年 10 月 5 日(火)より 8 日(金) まで、「Unveiling　the Mystery of Brain」をメインテーマに、脳機能のさらなる解明を目ざして福岡市福岡国際会議場に於いて開催させていただくことになりました。

国際誘発電位シンポジウムは、最新のコンピュータ処理技術を応用して脳の働きを客観的に描出し、脳内での感覚情報認知過程や運動・行動に伴う脳の活動を明らかにするとともに種々の中枢神経疾患・精神疾患による脳機能異常の生理学的・薬理学的メカニズムを解明し、脳神経・精神疾患の診断・治療・予防に貢献することを目的として設立されたものであります。

誘発電位関連の研究は最先端の大脳機能研究であり、神経に関わるすべての医学系 - 神経内科、精神科、心療内科、脳神経外科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、整形外科、リハビリテーション科等の臨床医学領域から生理学、臨床神経生理学、薬理学等の基礎医学、さらには心理学、言語学、情報科学、医用工学にまで及ぶ学際的且つ高度な学術的会議となるよう努力する所存であります。

今回は日本国内はもとより、特に、アジア各国の研究者に多数参加していただき、我が国とアジア太平洋地域とのさらなる連携を強めることを考えております。

関係各位のご協力を賜り本シンポジウムにつきまして広くお知らせ下さいますよう、何卒ご高配のほど宜しくお願い申し上げます。

謹白

第 8 回国際誘発電位シンポジウム
会長 辻　　貞俊
事務局：〒 807-8555
北九州市八幡西区医生ヶ丘 1-1
産業医科大学神経内科内
Tel　+81-(0)93-691-7438　Fax +81-(0)93-693-9842

国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004のご案内

【日時】 平成16年10月15日(金)～17日(日)
【場所】国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)
【テーマ】高齢化社会における痴呆ケア
【主催】 社団法人呆け老人をかかえる家族の会・国際アルツハイマー病協会(ＡＤＩ)
【後援】 厚生労働省・世界保健機関(WHO)
【ホームページ】 www.alzheimer.or.jp
【内容】

●10月15日(金)
〔サブテーマ〕痴呆ケアの将来戦略

基調講演 1	痴呆にかかわる世界の動き
2	高齢者と高齢化社会をどう考えるか
3	痴呆ケアの基本課題
4	環境と痴呆ケア
教育講演 1	アルツハイマー病の原因と経過
シンポジウム 1	痴呆の早期診断-その方法と意義-
ワークショップ 1	痴呆の治療－薬物療法と非薬物療法をどう組み合わせるか
2	痴呆ケアの質保証のための住居環境改善への挑戦
3	途上国痴呆研究グループ（10/66グループ）の調査研究報告
4	地域ケア（高齢者痴呆介護研究センター共同企画）

●10月16日(土)
〔サブテーマ〕痴呆の人と家族

基調講演 5	プライマリーケアにおける痴呆の人と家族への適切な介入
教育講演 2	多文化地域における痴呆の人と家族への支援活動
シンポジウム 2	痴呆の人を支える社会的支援ネットワーク
3	誰が介護するか？介護の今－国際比較－
4	介護家族の QOL
5	初期痴呆の人への支援
ワークショップ 5	地域における痴呆の人と家族へのインフォーマルサポート
6	利用者からみた介護保険-国際比較-
7	痴呆高齢者の行動障害の予防緩和と生活援助
8	痴呆の人のニーズ
6	アジアにおける痴呆ケア
ADI ワークショップ 1	啓発活動
2	痴呆の人への関わり
3	資金獲得活動

●10月17日(日)　〔サブテーマ〕痴呆と人権

基調講演 5	痴呆の人の権利
総括講演	これからの痴呆ケア－アジアと世界－
シンポジウム 6	痴呆の人の人権擁護の課題
7	高齢化社会における痴呆ケアの行動計画
ワークショップ 10	痴呆性高齢者の医療・福祉サービスにおける意思決定
11	痴呆の人の財産管理と遺産継承
ADI ワークショップ 4	痴呆の人と介護家族の選択と QOL との関係

【連絡先】 国際会議事務局
〒602－8143　京都市上京区堀川丸太町下ル

京都社会福祉会館
(社)呆け老人をかかえる家族の会　事務局内
ＴＥＬ：075-823-6544 ＦＡＸ：075-823-6545
Ｅメール：adiconference@alzheimer.or.jp
ホームページ：www.alzheimer.or.jp

研 究 助 成

公益信託 時実利彦記念賞 平成16年度申請者の 募集について

当基金は、下記要項により16年度申請者の募集を致します。

記

1. 趣旨
脳研究に従事している優れた研究者を助成し、これを通じて医科学の振興発展と日本国民の健康の増進に寄与することを目的とする。
2. 研究テーマ
脳神経系の統合機能及びこれに関連した生体の統合機能の解明に意義ある研究とする。
3. 研究助成金
「時実利彦記念賞」として賞状及び副賞(研究費)100万円を授与する。
4. 応募資格
原則として55歳以下とする。
5. 応募方法
所定の申請書に必要事項を記入し、主要論文のうち代表的なもの3篇以内の別刷一部を添付の上、下記事務局宛送付する。
・申込締切日　平成16年4月12日(月)必着
・申請用紙は、返信用定形封筒に80円切手を添付の上、下記事務局宛請求する。

公益信託 時実利彦記念脳研究助成基金事務局
〒100-8212　東京都千代田区丸の内1-4-5
三菱信託銀行個人資産相談部
公益信託ｸﾞﾙｰﾌﾟ　担当　小林

第4回(平成16年度) 財団法人材料科学技術 振興財団 山崎貞一賞 候補者募集

1. 授賞対象分野
(1)「材料」 (2)「半導体及び半導体装置」 (3)「計測評価」 (4)「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」
2.授賞対象者:詳しくは下記の請求先へお問い合わせ下さるか、URLをご覧ください。
(1)授賞対象は、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用的効果につながる優れた創造的業績をあげ、かつ／もしくは、今後そのような業績をあげる可能性が高い将来性のある人(複数人も可)とします。
(2)受賞候補者の国籍は問わず、日本国内において業績をあげた人を授賞対象とします。
(3)過去に応募されたことのある人でも再応募可能です。
3.顕彰:各分野それぞれに賞状及び副賞(メダル・賞金300万円)を贈呈します。
4. 締切期日:平成16年4月末日必着
5. 推薦書請求先、提出先:
〒157-0067　東京都世田谷区喜多見1-18-6
財団法人 材料科学技術振興財団 山崎貞一賞事務局
TEL 03‐3415‐2200　E-mail　prize@mst.or.jp
FAX 03‐3415‐5987　URL　http://www.mst.or.jp/

公　　募

生理学研究所が５年一貫制博士課程大学院生を募集します

総合研究大学院大学生命科学研究科では平成16年度より、従来の3年制博士後期コースに加え、5年一貫制博士課程をスタートします。当研究科生理科学専攻を受け持つ生理学研究所では、生体の基本構造である分子、細胞からシステムに至るまで、生体の機能と仕組みを解明すべく多角的に研究を行っており、その研究対象は、イオンチャネルの分子構造、細胞内信号伝達、容積調節、分泌現象、神経分化、シナプス伝達機構、神経ネットワーク形成機構や脳の感覚情報処理、運動や行動の発現及び学習認知機構などの高次脳機能に至るまで、多岐にわたります。本課程では、これらの各分野でトップクラスの研究を展開している経験豊かな生理学研究所のスタッフ陣が、最先端研究の現場において手厚い研究指導を行います。これにより医学、神経科学、生命科学全般にわたる広い視野をもち、世界レベルで通用する研究能力をもつ研究者を養成します。

入学資格

大学を卒業した者、及び平成16年3月までに卒業見込みの者、等(詳細は募集要項で確認ください)

出願期間　1月26日(月)～1月30日(金)

試験日程　2月16日(月)～2月17日(火)

選抜方法　英語、小論文、面接

問合せ先

生理学研究所については

ホームページ:http://www.nips.ac.jp/

〒444-8585

愛知県岡崎市明大寺町西郷中38

岡崎国立共同研究機構生理学研究所

細胞器官研究系生体膜

河西　春郎　TEL 0564-55-7831

募集要項、出願については、

〒240-0193

神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)

総合研究大学院大学　学務課学生厚生係

TEL 046-858-1525, FAX 046-858-1541

Email: kousei@soken.ac.jp

独立行政法人科学技術振興機構 さきがけ「タイムシグナルと制御」研究員募集

研究内容;神経伝達物質受容体輸送　詳細はホームページ:http://www.jst.go.jp/kisoken/presto/research/52timesignal/setou/ja_index.html

着任時期 ;2004 年 4 月以降　応談

応募締切;　2004 年 2 月 末日

連絡先　〒194-8511 東京都町田市南大谷11号

三菱化学生命科学研究所　　瀬藤光利まで

e-mail: setoum@libra.ls.m-kagaku.co.jp

ホームページ:http://www.jst.go.jp/kisoken/presto/research/52timesignal/setou/ja_index.html

国立精神・神経センター神経研究所では、疾病研究第六部第三研究室長(任期付研究員) 1名を下記により公募します。

1. 職名および人数:神経研究所疾病研究第六部第三研究室長１名　(厚生労働技官、任期付研究員)

2. 職務内容:国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第六部第三研究室長として、各種精神神経疾患の原因解明ならびに治療法の開発を行う。なお、本室長はモデル動物開発部動物生産室

長を併任し、霊長類の飼育管理ならびに霊長類を用いた研究の推進に従事する予定である。
3. 応募資格:高次脳機能を主たる研究対象とし、霊長類モデルの開発に関する十分な知識と技術を有する者。また、当該研究領域で博士号もしくは同等以上の研究歴を有すること。
4. 任期:採用日から5年間
5. 採用予定年月日:平成16年5月1日
6. 提出書類
(1)履歴書(写真貼付)
(2)業績目録(原著論文、総説、著書、その他にまとめて下さい。また、学会発表のリストに関しては、国内学会としては特別講演及びシンポジウムやワークショップなどの招待講演のリストを、国際学会としては、シンポジウムなどの招待講演と一般講演に分け、それぞれを明記して下さい。)
(3)主要論文3編の別刷り5部ずつ
(4)従来の研究内容のまとめと将来への抱負(2000字以内)
(5)総長宛の推薦状(機関の長または直属の上司等)
7. 提出締切日:平成16年2月27日(金)
8. 書類送付先:〒187-8551
東京都小平市小川東町4-1-1
国立精神・神経センター運営部庶務第一課人事係
TEL:042-341-2711
9. 問い合わせ先　:
国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第六部　山村隆
TEL:042-346-1723　FAX:04-346-1753
e-mail:yamamura@ncnp.go.jp
国立精神・神経センターホームページ http://www.ncnp.go.jp/

名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻教授公募

名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻(形態統御学講座)教授を公募いたします。

研究分野
生命科学の最前線で活発な研究を展開している方。研究分野は問いません。例えば、脳神経系の発生・生理、脳の高次機能、epigeneticな生命現象など、広範な分野を考慮しています。

なお、本公募は藤澤肇教授(平成16年3月31日定年退官予定)の後任人事です。また赴任いただいたのち、助手(1名)を採用することが可能です。
応募締切:平成16年3月31日
発令時期:平成16年10月1日　(予定)
応募書類:　(簡易書留でお送り下さい)
1. 履歴書
2. 論文目録
3. 主要な論文の別刷 10 編以内(最近の総説があれば含める)
4. 現在までの研究歴、研究概要、主要論文の位置づけ(2000 字以内)
5. 今後の教育、研究に対する抱負(2000 字以内)
6. 推薦書(2～3通)あるいは推薦書をお願いできる方、3 名の名前、連絡先(e-mail、住所、電話番号、Fax 番号)
7. その他、参考となる事項
例　(1) 過去5年間の科学研究費補助金や研究助成金の受領状況
(2) 過去5年間の国際会議での招待講演、国際会議主催などの記録
(3) 過去5年間のシンポジウム、ワークショップ、教育コースなどに対する活動状況
(4) 所属学会、学会活動(役職など)、受賞など、

応募書類送付先、問い合わせ先
〒 464-8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻

人事委員長　近藤孝男
電話:052-789-2498, Fax: 052-789-2963、email: kondo@biol1.bio.nagoya-u.ac.jp

当専攻についてはhttp://www.bio.nagoya-u.ac.jp:8001/ を御覧下さい

東北大学大学院教授募集

募集人員:大学院工学研究科 電子工学専攻
電子システム工学講座生体電子工学分野教授1名
専門分野:生体システムの機能発現の機構を明らかにし、その原理を用いた新しい電子デバイス・電子システムの開発に関する研究、例えば、生体システムの自己組織化などに着目した電子デバイスの開発
提出書類:
(1)履歴書(写真貼付),
(2)業績リスト(原著論文、著書、参考論文、国際会議招待講演等に分類),
(3)主要原著論文5編程度の別刷と各論文の要旨(200字程度)、
(4)これまでの研究概要(A4用紙2枚),
(5)今後の研究計画・抱負(A4用紙2枚),
(6)本人に関する問い合わせの出来る人2名(氏名、連絡先).
(7)その他特筆すべき研究業績(学会活動、受賞、特許、競争的資金獲得状況など)封筒に「生体電子工学分野公募書類」と朱記し、書留で送付下さい.
提出書類は返却致しません。
応募締切:平成16年4月末日
着任時期:平成16年10月以降(相談の上)
書類提出先:
〒980-8579　仙台市青葉区荒巻字青葉05
東北大学大学院工学研究科電子工学専攻・教授
金井　浩 (生体電子工学分野 教授選考委員長)
tel: 022-217-7081
URL: http://www.ecei.tohoku.ac.jp/
詳細はURL:http//jrecin.jst.go.jp参照のこと

その　他

平成16年度会費の納入について

会員各位にはますますご精励のこととお慶び申し上げます。
さて別便にて払い込み用紙(日本学会事務センター扱い)をお送りいたしますので、平成16年度会費ご納入下さいますようお願いいたします。
本学会の諸事業は会員各位の会費によって運営されておりますので、よろしくお願いいたします。

学会長　小幡邦彦

重要なお知らせ
―電子メールによるお知らせについて―

これまで本学会では電子媒体を用いた会員へのサービスの向上に努めて参りましたが、本年はさらにこれを推し進めるべく、広報委員会では下記のようなサービスの開始の準備を進めております。

1　入退会を専用ウェブサイトから行えるようにします。
2　入会(退会)承認とUMINへの登録が同時に行えるようにします。
3　住所変更などを専用ウェブサイトから行えます(UMINのホームページ(www.umin.ac.jp)でIDとパスワード(PW)を使用すれば今でもできます)。
4　会員名簿に専用ウェブサイトからアクセスできるようにします。

将来的には
1　選挙の電子化
2　過去の大会抄録のウェブ上での会員への公開
なども計画しております。

これらを実現するために今後は色々な局面でUMINのID とPWが必要となります。皆様方のID とPWは以前に書面で連絡を差し上げておりますが、念のため再度電子メールで(皆様が本学会に登録しておられるアドレスへ)一度だけお送りする予定です。

本学会からの電子メールはUMINのアカウント宛にのみお送りしますので、
・UMINのID とPWを用いて皆様の電子メールソフトの設定を変更していただくか、
・UMINのサイトにアクセスしていただき、転送設定をしていただく必要があります。

その方法は次号でもお知らせしますが、本学会のウェブサイト(http://www.jnss.org/page/umininfo.html)にも掲載しております。

皆様方にはお手間をおかけしますが、これにより学会運営のコストの低減と効率化に加え、情報伝達時間の短縮など会員サービスの向上を図ることができますので、どうかご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

日本神経科学学会広報委員会

神経科学ニュース、神経科学学会ウェブサイトへの記事の掲載について

学会への提言、研究雑感、学会見聞録、書評等神経科学の発展につながるものであればどのようなものでも結構ですのでお送りください。
1. 原稿は電子版のみを受け付けています。原稿は電子メール添付ファイルでお送り下さい。
(a)　受付可能なファイル形式はWord(2001以前)、EG Word(11以前)、Kacis Writerです。それ以外のにも或る程度対応可能ですが、事前にご相談ください。また作成に用いたアプリケーションに関わらずHTML, rtfファイルは受付可能です。テキストファイルも可ですが、その場合メール本文に埋め込んでください。
(b)　画像ファイルはPICT、JPEGまたはTIFFファイルで、可能な限り圧縮して本文とは別のファイルでお送りください。
2. 校正は行いません(お送りいただいたファイルをそのまま利用します)ので、誤りの無いことをお確かめの上、原稿をお送り下さい。
3. ニュースへの掲載は1回のみとさせていただきます。

神経科学ニュース電子版パスワード

本ニュースの電子版のダウンロードにはUMINのパスワードが必要です。皆様方の会員固有のuser ID, パスワードを入力してください。半角で、大文字小文字を区別して、入力してください。

編集後記

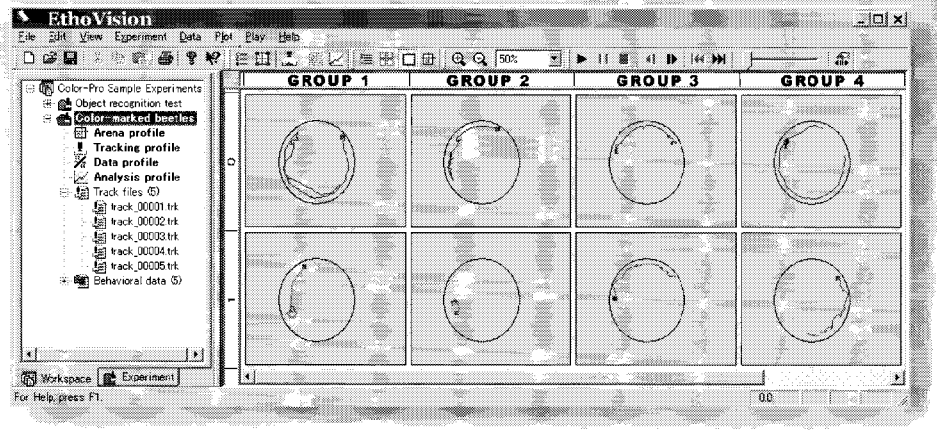
皆様､新年あけましておめでとうございます。2003年もあっという間に過ぎ去ってしまった印象ですが、イラク戦争とテロの頻発をはじめとして、国内外で暗く重苦しい出来事ばかりの一年であったように思います。2004年が明るい年になることを心から願いますが、身近なところでは４月からの国立大学の独立行政法人化をひかえ、波乱含みの様相です。様々な「改革」が結果として「改悪」にならないよう、十分気をつけねばならないと思います。ところで、現メンバーによる神経科学ニュースの編集も３年目を迎えます。御不満の点が多々あったと思いますが、これまでなんとか予定どおりに発行にこぎつけることができましたのも、村上富士夫先生をはじめとする広報委員会の先生方と会員の皆様の御協力のおかげと感謝しております。特に、ニュース編集小委員会の寺島、久保、鍋倉、坪川、小林、渡辺の各先生と日本神経科学学会の山根慶子さんには大変お世話になりました。神経科学ニュースをより一層充実させるため、皆様からの記事、アイデアなどお待ちしておりますので､どうかよろしくお願い申し上げます。4月からは一部メンバーを交代して編集を続けます。2004年が会員の皆様にとって良い年になりますようお祈り申し上げます。(狩野記)

発行：広報委員会
村上富士夫（委員長）
狩野方伸(ニュース編集小委員会委員長）
蔵田　潔(電子化推進小委員会委員長）
白尾智明（ホームページ担当小委員会委員長）

ノルダス

自動行動追跡・解析用ビデオ・トラッキング・システム

エソビジョン3.0



エソビジョンはこんな装置です

◇例えば16個並べたケージにそれぞれ2匹ずつのラットを入れ、その32匹のすべてを追跡したい…。
エソビジョンはこんな実験にパーフェクトに対応するビデオ・トラッキング・システムです。各個体の移動距離・速度、軌跡の形状、特定エリアでの滞在頻度・時間、レイテンシーなどの解析はもちろん、ソーシャル・インタラクションとして接近、回避、各個体間距離まで解析します。特に「数をこなさねばならない実験ルーティン」を力強くサポート。煩雑な作業はすべて自動化できます（上記はすべてエソビジョン・プロの仕様です）。

◇ケージはもちろん、プラスメイズ、ラジアルメイズ、ウォーターメイズ、オープンフィールド等すべての実験系に1台で完全対応します。主要な実験系には、サンプル・プロトコルを標準装備。ビギナーの方でもすぐにルーティンで使いこなせます。

さらに、格段に進歩した「バージョン3.0」では…

MPEGをはじめとするメディアファイルを映像ソースとして利用可能。これには実に多くのメリットがあります。

例えばDVDには最長で5時間もの映像を保存することができます。しかも映像のアクセスはほとんど瞬時。従来のテープ類に較べ、使い勝手・保存性で圧倒的に優れています。

メディアファイルを使用すれば、「早送りデータ取得」が可能になります。しかもテープのように時間情報が失われることはありません。パワフルなPCを使用すれば、例えば連続24時間分のデータを数時間で取得完了。

*1. エソビジョンの完全な機能実現にはUSBキーが必要ですが、これがなくても「データ取得」以外のすべての機能を使用することができます。

さらにあります。従来、必須だったA/D変換ボードが不要です。これは、ノートパソコンでもデータの取得が可能、という画期的な事実を示します。

ノートが使える。しかもエソビジョン自体にコピー制限はありません*1。そしてエソビジョンは、1つの実験プロジェクトの内容をたった一つのファイルに格納することができます。これを例えばネットワーク上に置けば、メイン・システムの所在に拘束されることなくどこでもデータの取得・解析が可能と言うことです。さらに複数のPCで解析を分担、などの離れ業も。

1台で、複数台の活躍。エソビジョンは、次世代の実験形態を先取りします

まだまだあります。従来からご要望の高かった、TTLパルス・ジェネレート機能を追加。例えばラットが特定エリアに入ったとき、フィーダを起動させるためのトリガパルスを出力できます。

従来はどうしても観察者の手を借りねばならなかった強制水泳実験。しかしエソビジョン3.0は独自のアルゴリズムを採用し、ラットのボディサーフェスの変化から「静・動」を自動判別し、カウントします。

詳しい資料のご請求・デモンストレーション等をご相談ください。

ノルダス社日本総代理店

ショーシンEM株式会社

〒444-0241 愛知県岡崎市赤渋町蔵西 1−14
TEL：0564−54−1231　FAX：0564−54−3207
www.shoshinEM.com　info@shoshinEM.com

阿修羅（アシュラ）登場。

HAMAMATSU

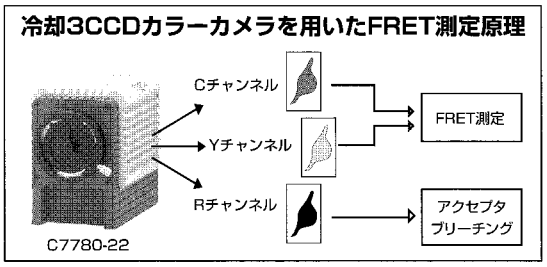
50th Anniversary

興福寺　阿修羅像

阿修羅像のような3つの顔を持つ 3CCD-FRETイメージングシステム誕生。

AQUACOSMOS/ASHURA（アクアコスモス／アシュラ）の名称は、蛍光イメージング技術における機能を個々のCCDチャンネル（チップ）に持たせた検出カメラが、3面の顔がそれぞれの表情（意味）をもっている阿修羅像とどことなく似ていることから命名されました。

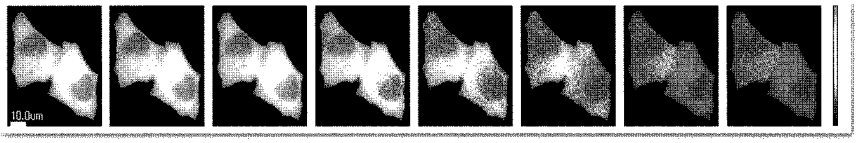
C・Yチャンネルを使い、CFP/YFPの蛍光画像を同時にかつ高感度に取得し、時間空間的なズレの無いFRET画像を観察できます。またRチャンネルを使いYFPの褪色過程をモニタし、光照射量を推定するアクセプタブリーチング機能を搭載し、FRETの定量化を実現しました。



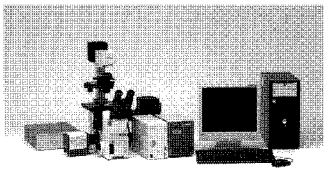
新プリズムを搭載し、最適な分光感度や高い蛍光検出能力を実現し
CFP/YFP FRET観察性能を向上

理化学研究所と共同開発のアクセプタブリーチング機能により
FRETシグナルの定量的評価が可能

※アクセプタブリーチング機能は、理化学研究所と共同で特許を申請中です。



▲YellowCameleon3.12を発現させたHelaS3細胞をヒスタミン刺激した時のカルシウムウエーブ
データご提供　:理化学研究所　脳科学総合研究センター　細胞機能探索技術開発チーム　永井 健治 先生、宮脇 敦史 先生



3CCD-FRETイメージングシステム AQUACOSMOS/ASHURA（アクアコスモス アシュラ）

浜松ホトニクス株式会社

システム事業部　特機営業部　〒430-8587　浜松市砂山町325-6　TEL（053）452-2148
E-mail　salesi@sys.hpk.co.jp　　Web site　http://www.hamamatsu.com
東京支店（03）3436-0491　　大阪営業所（06）6271-0441　　仙台営業所（022）267-0121

製品Webサイト

http://www.hpk.co.jp/Jpn/products/SYS/ASHURAJ.htm

☆製品Web siteからは、カタログのPDFファイルをダウンロードすることができます。ぜひアクセスしてください。

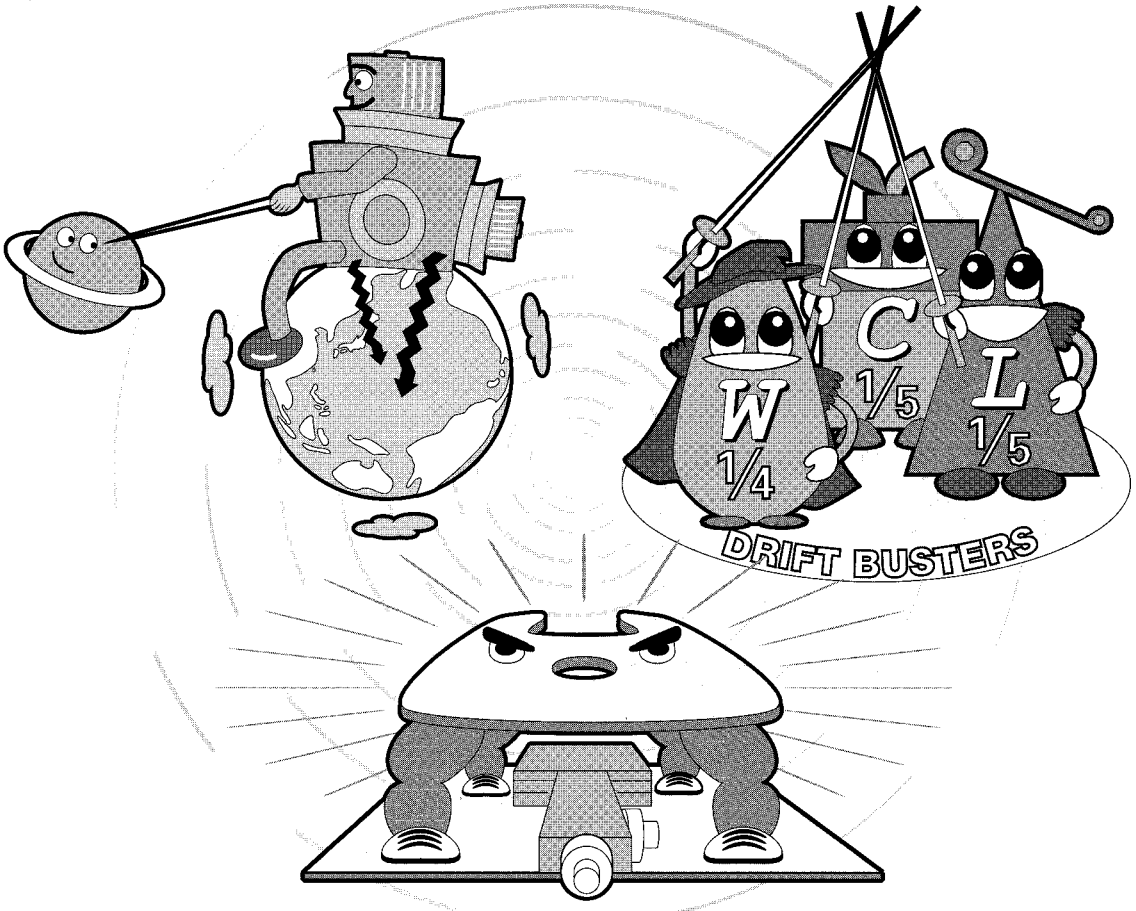
浜松ホトニクス創立50周年記念展示会

PHOTON FAIR 2004

2004年2月18日(水)～20日(金)
東京国際フォーラムにて開催決定！
最新情報は、順次Webサイトで公開いたします。
http://www.hpk.co.jp

NARISHIGE JAPAN **NARISHIGE**

Electro-physiology



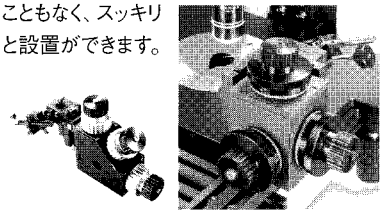
安定が一番

長時間のパッチクランプで、
細胞にダメージを与えないことを最優先に考えました。

手動三次元マイクロマニピュレーター

NMN-21/25

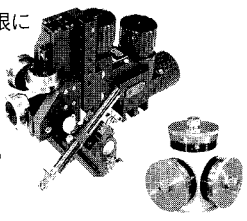
手動でありながら手の振動を針先に伝えない独自の構造を採用。電気コードやチューブがないので、電気障害などに悩まされることもなく、スッキリと設置ができます。



三次元水圧マイクロマニピュレーター
梃子式

MLW-3

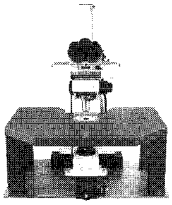
微動は400μmだけ。圧力制御を膨張係数の少ない水に、カートリッジを1:5タイプに、さらにテコの原理を応用した新機構の採用でドリフトを最小限にしました。ドリフトの発生が従来の1/100+αに抑えられます。



アイソレーションテーブルシステム

ITS-N/0/Z/Z2/L

各種顕微鏡に対応したアイソレーションシステムです。剛性、耐震性・安定性に優れ、複数のマニピュレーターを自由な位置にセット可能。大型ハンドルを装備したXYステージは、重たい顕微鏡もスムーズに移動させることができます。



詳しくは当社担当までお問い合せください。

インターネットホームページなら、他の各種製品の詳細も手にとるように判ります。 http://www.narishige.co.jp

株式会社 成茂科学器械研究所

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4丁目27番9号 TEL.03 -3308-8233 FAX.03-3308-2005 e-mail: sales@narishige.co.jp